

岩滝山遺跡

1971. 3

東大阪市教育委員会

刊行のことば

東大阪市教育委員会

教育長 益 倉 辰 次 郎

本市の市域には100カ所を越える埋蔵文化財包蔵地が存在し、その大部分が東地区の生駒山ろくに集中しています。

市域の発展に伴う開発事業によって、これらの包蔵地が失われ、またこれまで未確認であった包蔵地が新たに発見される場合も少なくありません。

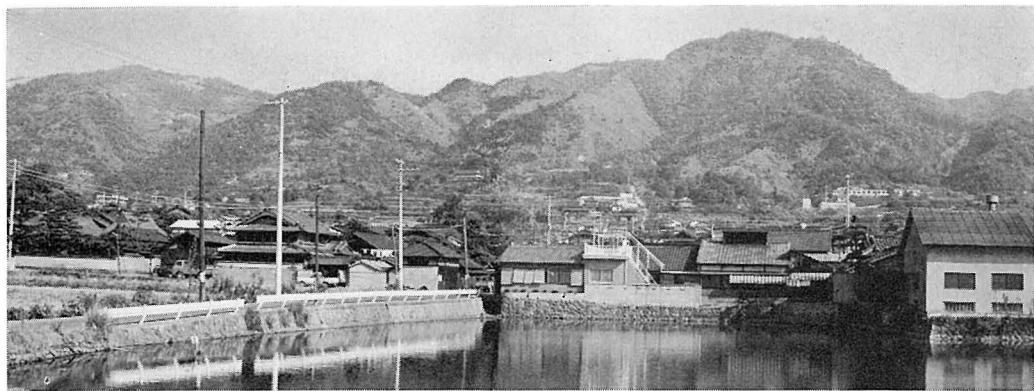
本市では、これら埋蔵文化財包蔵地の保存についてとくに留意し、現状調査、工事の事前チェック、範囲確認調査等を逐年進めています。

この岩滝山遺跡は、大阪府が府民の森関連事業として着手された「こうぎり自動車道」の敷設によって発見されたもので、記録保存に止まったとはいえ、関係各位のご理解によって発掘調査を実施することができましたことは幸であったといわなければなりません。

この調査概報を刊行するに当たり、調査および整理作業、原稿作成に従事して下さった調査員ならびに学生諸君のご労苦と、関係各位のご協力に対し記して感謝の意を表します。

例　　言

- 1 この冊子は府民の森関連事業として、昭和44年度より着工された「こうぎり自動車道」の敷設工事に伴って発見された弥生時代遺跡の発掘調査概報である。
 - 2 調査は、東大阪市教育委員会嘱託藤井直正（現主幹）が、大阪府の委託を受けて実施し、藤井直正を担当者に、原田 修君を調査員に委嘱し、市文化財専門委員荻田昭次氏の協力を得た。また調査補助員として、大阪商業大学考古学研究会および神戸山手女子短期大学歴史研究会、大手前女子大学文化研究会ほか多数の学生諸君の参加・協力を得た。
 - 3 本遺跡より出土した遺物の整理作業は、荻田昭次氏の指導のもとに、大阪商業大学考古学研究会所属の学生諸君が従事した。なお、遺構・遺物の実測は、北野 保・佐藤正則の両君が当たり、トレースは下村和子・北野 保両君の手に成る。
-

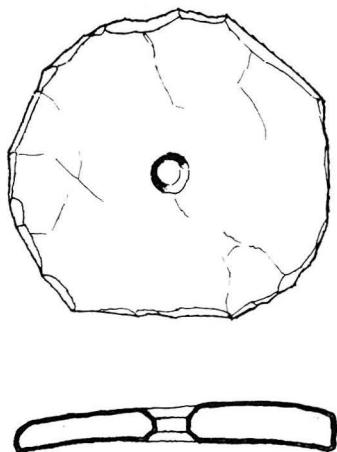


第1図 岩滝山遺跡の遠望

東大阪市岩滝山遺跡の調査

目 次

I はしがき.....	2
II 遺跡の位置	4
III 遺跡の状態	5
1 A地点の遺構.....	5
2 B地点の遺構.....	7
IV 出土遺物.....	10
1 弥生式土器.....	10
2 須恵器その他の土器.....	11
3 その他の遺物.....	11
V まとめ.....	12
調査参加者名簿.....	12



第2図 土製紡錘車（第2号住居跡出土¹⁴）

I はしがき

生駒山系の緑地保全をはかり、合わせて府民に憩の場を提供することを目的とする「府民の森」の造成は、府政百年記念事業として計画され、昭和42年度から9カ年にわたる事業がすでに着手されている。この「府民の森」は、生駒山系を枚方市から柏原市までの約60kmをむすぶ自転車道と、その間に点在する大小の苑地から成るもので、自然環境の整備を積極的に推進するための計画である。

これに付随して、昭和44年度からは、東大阪市上六万寺町を起点とし、上四条・客坊・五条出雲井・東豊浦各町の山腹を縫って暗峠^{くらがいり}を経て、「府民の森」の一つ“なるかわ林苑”に至る「こうぎり自動車道」の開設工事が着工された。この山ろく一帯は、埋蔵文化財包蔵地の密集地域であるため、これらの保存については、かねてから府当局に要望していたところである。また工事の進行に伴って、これまで未発見・未確認であった包蔵地が発見されることも予想されるため、関係機関と連携して工事着手後も必要な措置をとり得るよう十分な注意をもってのぞむこととした。とくに先年、この自動車道の起点のすぐ西側の土地に工場一棟が建設された際、多数の屋瓦片や中世の土器・陶器の破片が出土し、地名としてのこっている六万寺の遺構と考えられる建築遺構を検出したことから、今回の工事でもその発見を予想していた。

昭和44年後半に至り、自動車道起点から北へ約400m行った工事現場で土器が出土している旨の報に接した。直ちに東大阪市教育委員会から原田 修君が現地に行ったところ、六万寺町1丁目837—4番地で、ブルドーザーによって削られた路面上に黒色土層があらわれ、弥生式土器・須恵器の破片が散布し、東側の断面に竪穴式住居跡の一部と考えられる落ち込みのあることを確認して來た。

このため府農林部水産林務課に、現状と調査の必要を説明し、大阪府の協力のもとに、昭和45年1月16日より2月2日までの18日間にわたって緊急発掘調査を実施した。これがA地点で、弥生時代後期の竪穴住居跡と、古墳時代の溝状遺構を検出することができた。

このA地点の調査開始後、ここから北へ谷を越えた六万寺町1丁目1951—6番地でも、同様な黒色土層面が露出し、弥生式土器片の散布がみとめられたため、A地点の調査完了をまって調査を行なった。ここでも竪穴式住居跡を検出し、弥生式土器・砥石等が出土した。

この発見と調査によって、付近一帯に弥生時代後期から古墳時代の遺跡の存在を確認することができたが、とくに弥生時代後期の竪穴住居跡は、本市域でははじめての発見であり、この遺跡が標高80mの地点に立地している点、高地性集落の一例と考えられる上においても重要である。ここからすぐ上手の往生院境内で、昭和13年に弥生時代後期の鉢型土器が出土しており、また昭和31年にも付近から弥生後期の土器が破片であったが出土している。従ってこれらの地点をふくむ斜面の一帯に弥生時代後期の集落遺跡が存在していることを知ることができた

ことは大きな収穫であった。この遺跡の名称は、岩滝山のふもとに存在していることから「岩滝山遺跡」と呼ぶことにしたい。

この調査は、大阪府の委嘱を受けて河内考古学研究会が調査・記録作成に当たったもので、藤井直正（当時東大阪市教育委員会嘱託）が担当者となり、原田 修君を調査員として作業に当たった。また大阪商業大学考古学研究会、神戸山手女子短期大学歴史研究会、大手前女子大学文化研究会所属の学生諸君の協力を得たほか、島田義明・大和賢三両君の援助を受けた。さらに出土遺物の整理作業は、東大阪市文化財専門委員荻田昭次氏の協力を得て、大阪商業大学考古学研究会の北野 保・佐藤正則・山下純一郎・藤定一久の諸君によって行なった。なお本報告書の執筆分担は下記の通りである。

I はしがき	藤井直正
II 遺跡の位置	藤井直正
III 遺跡の状態	北野 保
IV 出土遺物	荻田昭次
V まとめ	北野 保

以上の調査に当たり、現場の工事関係者ほか多数の方々のお世話になった。記して感謝の意を表する。

II 遺跡の位置

生駒山地の主峯生駒山から、鳴川の渓谷を距てた南側に、岩滝山とよばれる一峯がある。^{なるかわ}西側の斜面は比較的急峻であるが、山腹から山ろくにかけて何本かの尾根が西方に向かって延びている。今回発見した岩滝山遺跡は、その尾根の一つ、標高約 80 m 前後をはかる地点に立地している（図版1参照）。

この岩滝山のふもとには、平安時代の中ごろ、長曆年中（AD 1,037～'40）に浄土信仰の道場として創建され、岩滝山の名を山号にもつ古刹往生院が所在している。¹⁾ A地点はこの往生院のすぐ下に当たり、またB地点はA地点から谷一つを距てた北側に位置している。A地点とB地点との間隔は、直線距離にして約 200 m をはかる。

東大阪市の東南部を占めるこの地域、すなわち鳴川谷によって形成された扇状地と山ろくの一帯は、古代遺跡の密集地帯であり、各時代の遺跡が随所に存在している（第1図）。

これらの遺跡を時代の古いものから列記すると、まず本遺跡の東北方約 100 m の地点から、縄文時代草創期のものと考えられる有舌尖頭器が発見されており、この山ろくの地帯が遠く 1 万年前ごろから人びとの生活のはじまっていたことを物語っている。²⁾ またここから西南方約 1 km の地点には、最近の発掘調査によって縄文時代後・晩期の集落であることが明らかになって来た横小路町の馬場川遺跡があり、さらに西南方約 1.2 km には、縄文時代から古墳時代につづく集落の遺跡と考えられる縄手遺跡がある。³⁾ この両遺跡は、ともに標高 15～18 m のところに立地している。岩滝山遺跡のほか、弥生時代から古墳時代の集落と考えられる遺跡は、縄手遺跡をはじめ点々と分布が見られ、弥生時代乃至古墳時代の村落の形成と変貌の過程を示していることは興味が深い。岩滝山遺跡の所在する地点をふくむ山ろくの一帯は、後期古墳の群集地帯であった。早くから水田として開拓され、また戦後の開墾によって、今日では群集墳としての形態はまったくとどめていない。わずかに本遺跡B地点から北へ約 200 m のところに存在する高塚古墳、⁴⁾ 北西 150 m のところにある二本松古墳⁵⁾ などはそのなごりであり、墳丘・石室ともに完存するものとして貴重である。

- 1) 岩滝山の名称は、古代から中世にかけて生駒山に山岳信仰がひろまり、修験道の道場または滝行場がつくられたことによるものであろう。現在も山頂近くに岩場らしい遺構がのこっている。
- 2) 創建時の往生院は、現在の寺の位置よりも東方の山中にあり、西面する金堂跡（府指定史跡）をのこしている。現在の往生院は江戸時代のはじめに再建されたものである。
- 3) 天台宗宝積寺がつくられた際に出土したもので、同寺に所蔵されている（『枚岡市史』第1巻本編）。
- 4) 東大阪市横小路町 3～4 丁目に所在する縄文時代後・晩期の集落遺跡である。東大阪市教育委員会『馬場川遺跡 I』『馬場川遺跡 II』、藤井直正「馬場川遺跡の調査」月刊文化財 第82号所収等参照。
- 5) 東大阪市南四条町、縄手中学校・縄手小学校敷地全体にひろがる集落遺跡である。昭和44、45年度の発掘調査によって縄文時代後期の遺構が検出され、多数の縄文式土器・石器等が出土している。
- 6) 東大阪市六万寺町 1 丁目に所在し、横穴式石室を主体構造とする後期の方墳である（『枚岡市史』第3巻史料編-1参照）。
- 7) 東大阪市六万寺町 1 丁目に所在する円墳である。府立老人ホーム長生園の敷地内に保存されている。

III 遺跡の状態

1 A地点の遺構

A地点においては、調査に先立つ道路新設工事において、ブルドーザーによって削り取られた道路上に黒色土層が露出し、掘削によってできた道路東側の断面に竪穴住居跡の掘り形と考えられる落ち込みが確認された。また道路上に検出された黒色土層中には、弥生式土器・須恵器の破片が散在していることによって住居跡の存在が予想された。

発掘調査によって記録することのできたA地点の層位は第3図の通りである。

第1層は現在の表土層であり、この土層の上面における標高は76mをはかる。全体として黒褐色土層であり、部分的に差異は認められるが、厚さは平均して約40cmである。

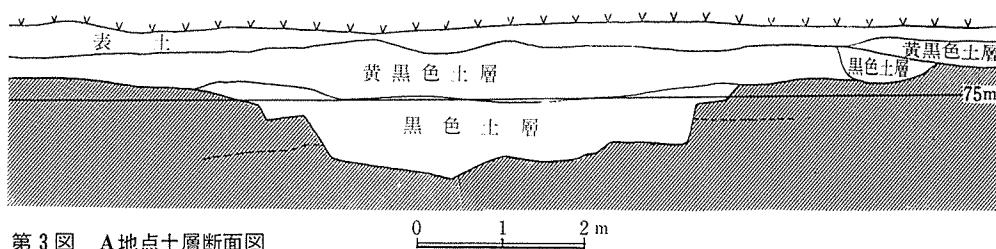
第2層は黄黒色土層であり、極めて細かい砂利を全体的に包含しており、遺跡全体に堆積している。しかし竪穴住居跡より南へ約1.2mの部分において黒色土層（遺物包含層）によって一部分は切断されていることが認められる。この土層中、その上面において瓦器の灯明皿、大形甕型土器、土釜等の破片が出土したことから、この黄黒色土層は歴史時代の遺物包含層と考えられる。遺構の存在は認められなかったが、この斜面一帯に存在しているものと考えられ、六万寺跡関係の遺物と推定される。

第3層は黒色の遺物包含層である。この第3層より出土する遺物はほとんど畿内第5様式の弥生式土器片であるが、若干古墳時代後期の須恵器の破片も検出された。この黒色土層は、低湿地遺跡に見られるような粘着力の強い粘土層ではなく、きめの細かい砂利を含む土層である。またこの第3層は、単に住居跡内に堆積しているだけでなく、住居跡以南においても部分的にはあるがその存在が認められる。

第4層は黄色砂利層であり、地山と考えられる。この第4層はかなり大粒の砂利を全体的に含んでいる。

第1号住居跡

現場における観察と、記録にとどめた実測図によって検討を加えた場合、この竪穴住居跡の



第3図 A地点土層断面図

掘り形は第2層すなわち黃黒色土層の下面にあり、第4層の黃色砂利層（地山）まで掘られていることがわかる。

調査当時の現表土下約1.5mに床面をもち、床面においては若干の凹凸があり、平坦に整地された形跡は認められない。ただ住居跡内部の南壁に接した部分においてだけ、床面の黃色砂利層すなわち地山とほとんど差異を認めることのできない黃色土層が掘り形の肩より床面の上部に亘って堆積していた。

この豊穴住居跡の全面発掘は、工事現場であることから不可能であったが、検出された部分をもとに復原推定した場合、直径約5mの円形プランを有するものと考えられ、およそ 15.7 m^2 の広さをもつものであったことが推定される。北半分は東側断面で検出した北辺より住居内に向かっている幅約25mの溝状遺構によって切断されているが、この溝状遺構はその底部より出土した須恵器から古墳時代後期すなわち6世紀後半のものと考えられる。調査開始当時、この豊穴住居跡付近には、ブルドーザーによって掘削された古墳主体部に適応するような閃緑岩や花崗岩が乱雑に放置されていたが、この場所に古墳が存在していたという明確な資料は得られず、また古墳時代後期に属する住居跡などの具体的な遺構も検出することができなかつた。従ってこの豊穴住居跡を東西に切断している溝状遺構の性格については不明である。

検出した豊穴住居跡の床面からは2カ所の柱穴を見つけることができた。第1号柱穴は南壁から約1.3mの内側にあり、二段の落ち込みをもつものである。床面上部での口径は62cmをはかり、中段での口径は36cmの不整円形で、底部の最狭部の径は24cmをはかる。深さは約59cmをはかり、比較的大きいもので、底部においては平坦ではなくU字状になっており、柱の安定のために据えたと考えられる長さ20cm、幅10cm、厚さ約20cmの石を伴出した。

第2号柱穴は南壁よりわずか15cmの内側にあり、楕円形の掘り口をもつ口径40cm、底径20cm、深さ42cmをはかるものであるが、掘り口上部より底部までは第1号柱穴よりもかなりの傾斜をもって掘られていることがわかる。底部からは若干の弥生式土器片が出土したが、据え石の存在は認められなかった。第1号柱穴の掘り口が西側がほぼ同じ傾斜で底部まで掘られているのに対して、第2号柱穴の掘り口は中心部方向に対して 28° の傾斜をもって掘られていることがわかる。この点については、本住居跡からは2カ所の柱穴しか検出しておらず、また桂根などの確定的な資料も得ていないため、早急に結論を出すことは危険であるが、柱が中心方向に対して傾いた恰好で立てられていたことを推定することのできる事例であろう。さらにこの第1号—第2号両柱穴について共通して言えることは、床面の掘り口において約17cm程度の石が置かれていることである。

床面は南壁から約90cmのあたりから内側に15cmほど低くなってしまい、中央部より前記の溝状遺構にかけてかなりの削平を受けている。この床面を清掃することによって、ほぼ中央部から多数の弥生時代後期（畿内第5様式前半）の土器が出土したが、その一つ鉢型土器は、南壁より約32cm内側で底部を上にした状態で出土し、また南壁下において、同じく底部を上にした状態で小形鉢型土器が出土した。なお床面上には多くのこぶし大から人頭大以上の石が出土

したが、その中の一つ第1号柱穴から約30cm東北にはなれたところで発見した30cmの大の石は花崗岩で、表面がいちじるしく焼けただれており、火の使用を物語る確定的な例であるため、炉跡の存在を考えたが、炉跡であるという具体的な資料は得ることができなかった。また本住居跡に伴う周溝についても、存在が認められなかった。

2 B地点の遺構

A地点同様、ブルドーザーによって削りとられた道路上に黒色土層が検出され、弥生式土器の散乱が認められたため、A地点の調査終了後継続して調査を行なった。A地点と同じく工事の関係上全面発掘を行なうことことができなかつたのは残念である。

B地点の層位は第4図の通りである。

第1層は現在の表土層であり、この土層の上面において標高83cmをはかる。A地点と同じ黒褐色土層であり、厚さ10cmから最大80cmまでかなりの差異がある。

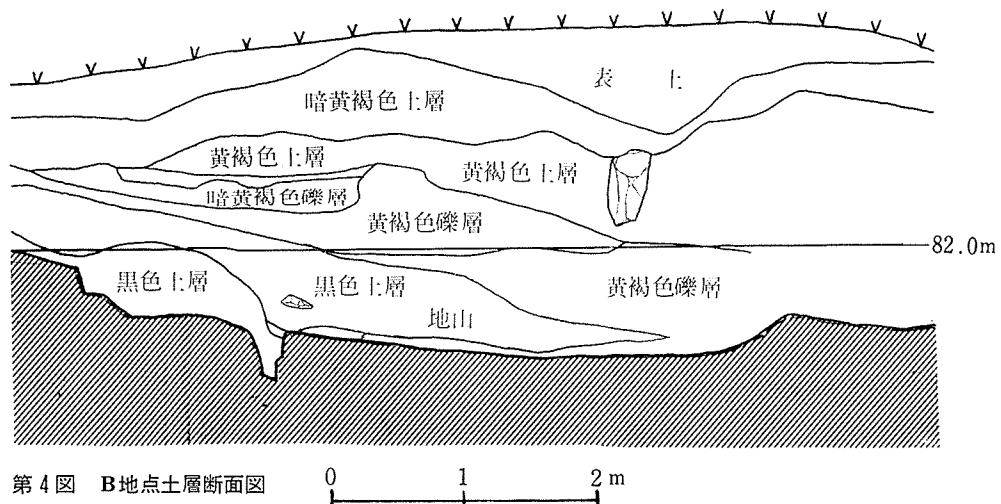
第2層は暗黄褐色土層であり、第1層と同様その厚さにはかなりの幅がある。全体的にきめの粗い層で遺跡全体に堆積している。

第3層は黄褐色土層でかなりの礫を包含しており、遺跡以外の場所においてはこの層は認められない。

第4層は暗黄褐色土層で第3層の黄褐色土層と同じく全体的に礫を包含しており、部分的に存在する層である。

第5層・第6層は黄褐色土層で、第3層の黄褐色土層とほとんど差異を認めることができないが、わずかにこの層に含まれる礫が大きいことができる。

第7層は黒色土層で、後述する第8層の黒色土層と表面的にはほとんど同じであるが、遺物を包含していない。



第4図 B地点土層断面図

第8層は黒色土層であり、遺物包含層である。この第8層より出土する遺物はすべて畿内第5様式の弥生式土器片である。

第9層は黄褐色土層（地山）である。この層はA地点同様少なからず砂利を含んでいるが、異なる点としては少し粘着力をもっている点である。

第2号住居跡

調査によって、この地点においても1基の竪穴住居跡を検出したが、この竪穴住居跡に伴う第8層黒色遺物包含層が第7層の黒色土層、第6層の黄褐色土層によって切断され、断面において見る限りでは、南側ではこの状態が確認されないため第7層・第6層の時期においてかなりの破壊を受けたものと考えられる。立地から考えて、西側にかなり傾斜する位置につくられた竪穴住居跡であるため、東西の掘り込みには少なからず高低差を生じているものと思われるが、ブルドーザーによって掘削されており、その正確な数値は不明である。東側の断面で見た場合、この竪穴住居跡は約7度の傾斜をもって掘られていることがわかる。床面は高い部分で現表土から約2.2m、低い部分で約2.5mであり、その差は約30cmである。

平面は北壁の腕曲状態から想定して、A地点の第1号住居跡と異なり、隅丸方形形状のプランを有し、一辺5mの竪穴住居跡と考えられる。しかし北壁の部分をのこしてほとんど削平されているため、規模・面積については不明である。

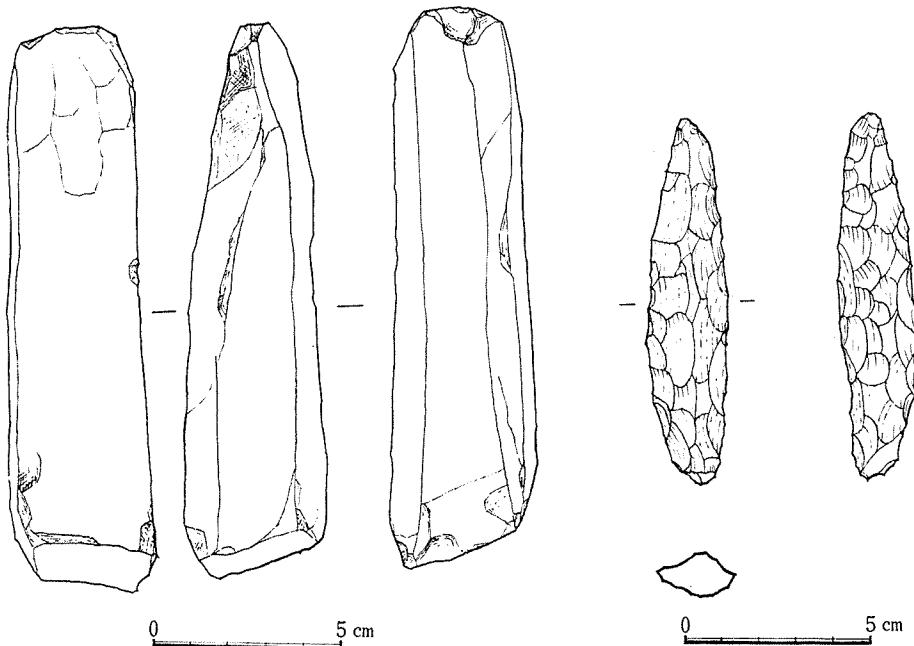
第3図に見られる通り、北壁の掘り形肩より約2m南において床面は約10cmの落ち込みとなり、高低差を生じている。北側の高い床面の黄色土層にくらべてこの低い部分はわずかに異なり、茶色を混えた黄色土層である。

この住居跡では計6カ所のピットを検出した。第1ピットは、東側断面に接してその半分を確認したが、復原推定した場合不整の円形で、口径約35cm、底径28cm、深さは平均して約30cmをはかるもので、底部においては北より南へ9~10cmの傾斜があるがほとんど垂直に掘られている。第2ピットは不整の方形形状ピットで、口径は15~23cm、底径13cmから16cmをはかり、深さは約14cmほどの比較的浅いものである。第3ピットは口径23cmから29cmの不整な方形形状ピットで、底部は2分されており、比較的浅い部分で深さ9cm、深い部分で11cmであり、ピットというよりも浅鉢形の落ち込みである。深い部分の底部において、2個の10cm大の石を検出した。第4ピットは口径29cmから35cmをはかる不整梢円形をなし、底径は17cmから広いところで27cmをはかり、掘り口において長さ20cm、幅10cm大の石を検出した。深さは26cmをはかる。第5ピットは口径26cmをはかり、底径14cmのかなりの傾斜をもっており、深さは21cmで、底部には長さ9cm、幅6cm大の石を検出した。第6ピットは本住居跡のもっとも南に位置し、口径22cm、底径約23cmをはかり、ほとんど垂直に掘られているが、わずかに袋状をなしており、深さは36cmと本住居跡では最深のピットである。

以上、本住居跡においては6個のピットを検出したが、柱穴の相互関係は、使用目的や適合

状態から見て、第1ピットと第2ピットさらに第6ピットが、柱穴としての使用目的を達成し得るものと考えられる。第1・第3・第4・第5の各ピットには、掘り口においてA地点の柱穴と同様、大きさはかならずしも同じではないがそれぞれ石がおかれていた。北壁の下には、A地点の第1号住居跡では認められなかった周溝の存在を確認することができた。幅は最狭部で5cm、最広部で20cmをはかり、第3ピットは北側においては北壁に対して約60cmの落ち込みとなっている。深さは東西においてわずかではあるが高低差をもっているが、平均して5cmほどのごく浅い小溝である。

本住居跡においても炉跡を確認することができなかったが、床面からは多数の弥生時代後期（畿内第5様式）の土器片が出土した。また長さ10cmのサヌカイト製石槍が掘削された黒色遺物包含層より採集されている。さらに住居跡床面より砂岩製の砥石が出土したことは、本住居跡において鉄製利器が使用されていたことを裏付けるものとして貴重な資料である。



第5図 砥石（第2号住居跡出土）

第6図 石槍（B地点採集）

IV 出土遺物

今回の調査によって本遺跡から出土した遺物としては、A・B両地点の住居跡において出土した弥生式土器、およびA地点の住居跡を切斷している溝状遺構において検出した若干の須恵器がある。また少量ではあるが、表面採集によって歴史時代の遺物を得ることができた。これらについて若干の解説を試みる。

1 弥生式土器

本遺跡のA・B両地点、すなわち第1号・第2号の住居跡から検出した弥生式土器はほとんど同時期のものであり、年代的差異は認められない。従って両地点の土器は合わせて器種別に配列した。図中の(A) (B)はそれぞれA地点、B地点の遺物、(A') (B')は両地点住居跡内の出土遺物である。

1) 壺型土器A

球形あるいはイチジク形の胴に漏斗状に広がる口縁をもつ土器である。口縁端面が無文のもの(5~7)、回線文を施こすもの(4)、回線文を施こし竹管文をつけた円形浮文をかざるもの(1)、竹管文のみを施こすもの(3)がある。4は口縁上面にヘラ磨きを施こしている。器台の口縁かも知れない9・10はこれらの壺型土器の底部である。

2) 壺型土器B

8は口径22cmの直立する口縁をもつ土器である。頸部に軟弱な櫛描直線文と波状文を施こしている。また口縁下部に突帶らしいものがあるが、全周を囲繞している形跡はない。頸部に櫛描文を施こしていないが、ほぼ同寸の長頸壺が西ノ辻遺跡E地点から出土している。第5様式の時期に作られた長大な頸をもつ壺型土器の一例である。

3) 壺型土器C

短かい直口に近い頸部をもつ壺型土器である。輪積みのあと、手づくねのあとが見られる粗製の土器である。

4) 肋型土器

「く」の字状の口縁をなし、胴部径が口縁部径より大きくなる。14・15は口縁部下面にヘラ先刺突文がみられる。16は口縁端が丸味をもち、17は二重口縁になっている。

5) 鉢型土器

18は完形の鉢型土器である。内外面ともヘラ磨きによる丁寧な作りをなし、内弯する口縁を二重につけている。19は「く」の字形の口縁をもつ鉢型土器で、内面に稜がある。20は同種の鉢型土器にU形の把手をついている。21~28は鉢型土器の底部である。手づくねのあとが見られる粗製の作りで、この時期の底部の作りをよくあらわしている。

6) 高坏型土器

29・30は浅い坏に立ち上って外反する口縁部をつけた高坏型土器である。31～36は円錐上に広がる高坏形土器の脚部である。小円孔を穿っているものが多い。脚部の裾の広がりの大きいものと小さいものがある。33は脚部に沈線文を施している。37は柱状の脚部に平たい裾をもち、その端に刺突による小孔を穿っている。

7) そ の 他

38は柱状の底部をもつ土器である。もとの器形はよくわからないが、底部のまわりに煤がいちじるしく付着しているので、煮炊きに使用した容器であったと考えられる。

2 須恵器その他の土器

1) 須 恵 器

蓋坏の蓋が2個、身が1個、高坏の脚部1個を図示したが、このほか破片が若干ある。これらの須恵器はA地点の発見当初における表面採集で、A地点第1号住居跡を切断している古墳時代の溝状遺溝から出土したものである。いずれも6世紀後半に属するものと考えられる。

2) 瓦 器

小型の瓦製の灯明皿である。平安・鎌倉時代に年代づけられるもので、このほか土釜片・すり鉢片等があり、同時期の遺物であり、六万寺跡関係の遺物と考えられる。

3 その他の遺物

第6図はサヌカイト製の打製石槍で長さ10cmをはかる。B地点の住居跡外で表面採集したものである。付近に弥生第5様式以外の遺物包含層がないからこの時期のものであることは間違いない。

第5図は粘板岩製の砥石であり、長さ15cmをはかる。B地点第2号住居跡出土。

ここに記述した弥生式土器は、A・B両地点の竪穴式住居跡から出土したもので、この付近に他の時期と見られる弥生時代の遺物包含層は存在しておらず、純粹な一括土器として重要な資料である。

A・B両地点の距離は約200mであり、谷一つを距てた山ろく斜面の鞍部に立地しているの両地点間の土器の上には年代差はみとめられず、土質は軟質で茶褐色の焼上りを見せている。

本遺跡の北方約3kmに東大阪市東山町、弥生町には西ノ辻遺跡が存在している。この西ノ辻遺跡の土器とは土質を異にしているが、小林行雄博士が西ノ辻遺跡出土の土器を資料としてまとめられたN地点式—I地点式—E地点式—D地点式の編年中の弥生時5様式の前半に当たるI地点式・E地点式の形式に限られる。文様が少なく、粗製の作りで、叩目仕上げの少ない、いわゆる西ノ辻式の土器である。

本遺跡のA・B両地点は、二つの竪穴式住居跡のほか重複する遺跡もなく、包含層の範囲も狭いので、短期間の一時的な高地性住居であったと考えられる。

V ま と め

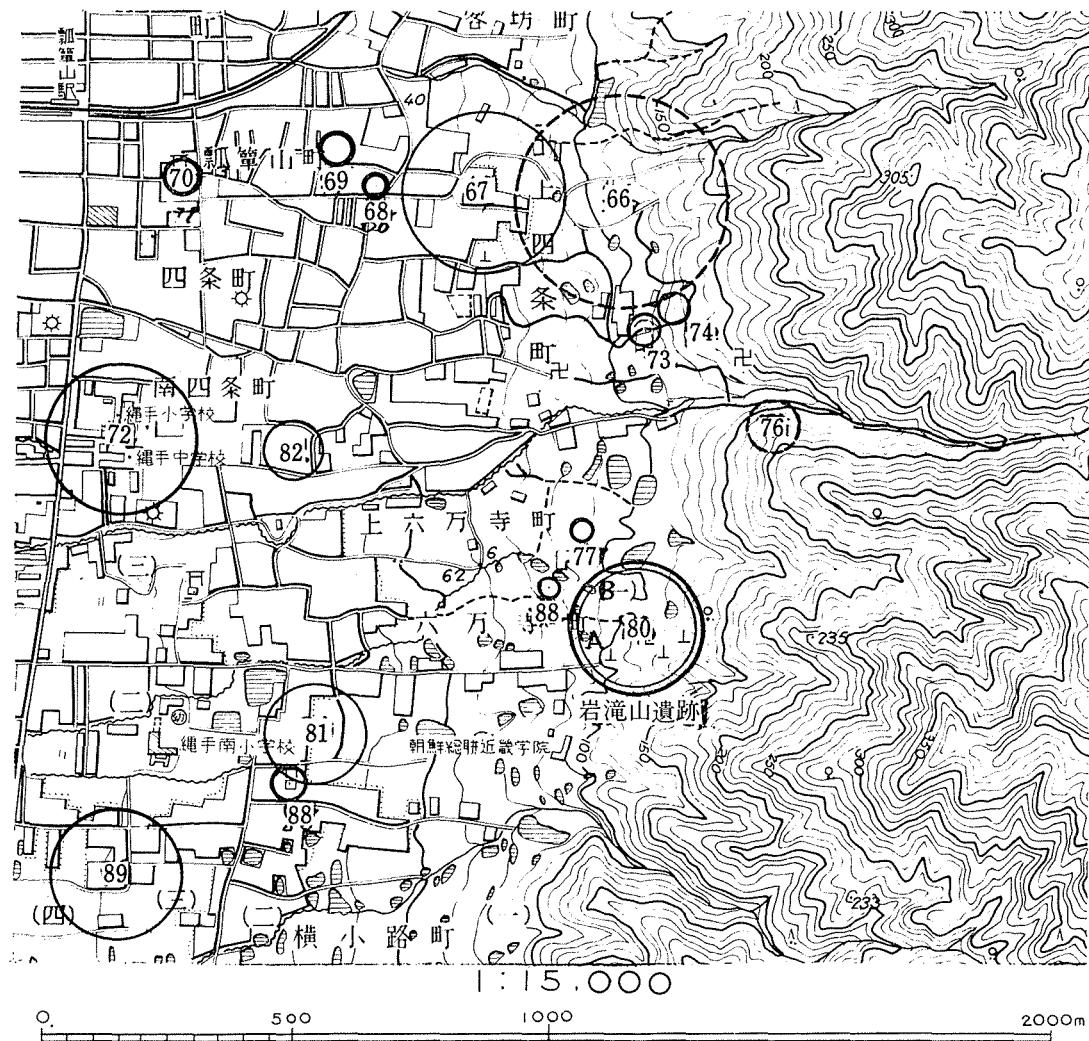
生駒山地西ろくの標高80mを有する本地点に、弥生時代後期の堅穴住居跡ないし集落跡が立地しているということについては、今回の調査着手までまったく予想されていなかった。わずかに本遺跡の南東約50mに位置する往生院の境内で、昭和13年に口径14.5cm、底径5.2cm、高さ9cmをはかる畿内第5様式の鉢型土器と、そのさらに東方往生院靈苑の敷地で若干の土器破片が出土していることは知られていたが、遺構の存在は不明であった。

今回の調査によって2基の堅穴住居跡を検出したこと、弥生式土器をはじめとする遺物が出土したこと等によって、これらの両地点を結ぶ南北250m、東西50mにわたる範囲に遺跡が存在していることがわかり、多くて堅穴住居跡すなわち集落跡の埋存している可能性が大きい。このことは、河内地方とくに生駒山地西ろく地域における弥生時代の社会的動向の推移、あるいは大阪湾沿岸地域における高地性集落の一例である点において貴重な資料を提供するものと考えられる。しかし今回の調査は、自動車道の建設に伴うものであり、調査区域も予想される本遺跡のごく一部分に過ぎず、集落の全体的規模や、周溝・墓域等の存在、あるいはこうした遺跡の状態から考えることのできる集落の政治的背景や立地・機能の問題など、多くの学問的課題がのこされている。その解明は今後における資料の検討、さらに広範囲にわたる組織的な発掘調査にまつこととし、調査で得ることのできた本遺跡の概要を記すにとどめた。

調査参加者名簿

1. 調査担当者	藤井 直正				
2. 調査員	荻田 昭次 原田 修				
3. 調査補助員	北野 保 内田 和博 太田 幹男 片山 彰一 亀 俊秀 加納 誠治 小西 良近 小山 良和 佐藤 正志 佐藤 正則 佐久間とも子 谷 輝文 中村 吉秀 藤定 一久 真殿 基義 宮本 栄二 山下純一郎 (大阪商業大学考古学研究会) 浅田真由美 今村 寿子 岩崎 洋子 里見宜資子 森下 共子 安田 洋子 山野 恵子 (神戸山手女子短期大学歴史研究会)				
	下村 和子	村尾勢津子	(大手前女子大学文化研究会)		
4. 協力者	奥井 哲秀	島田 義明	本城 節子	大和 賢三	

図版一 岩滝山遺跡の位置

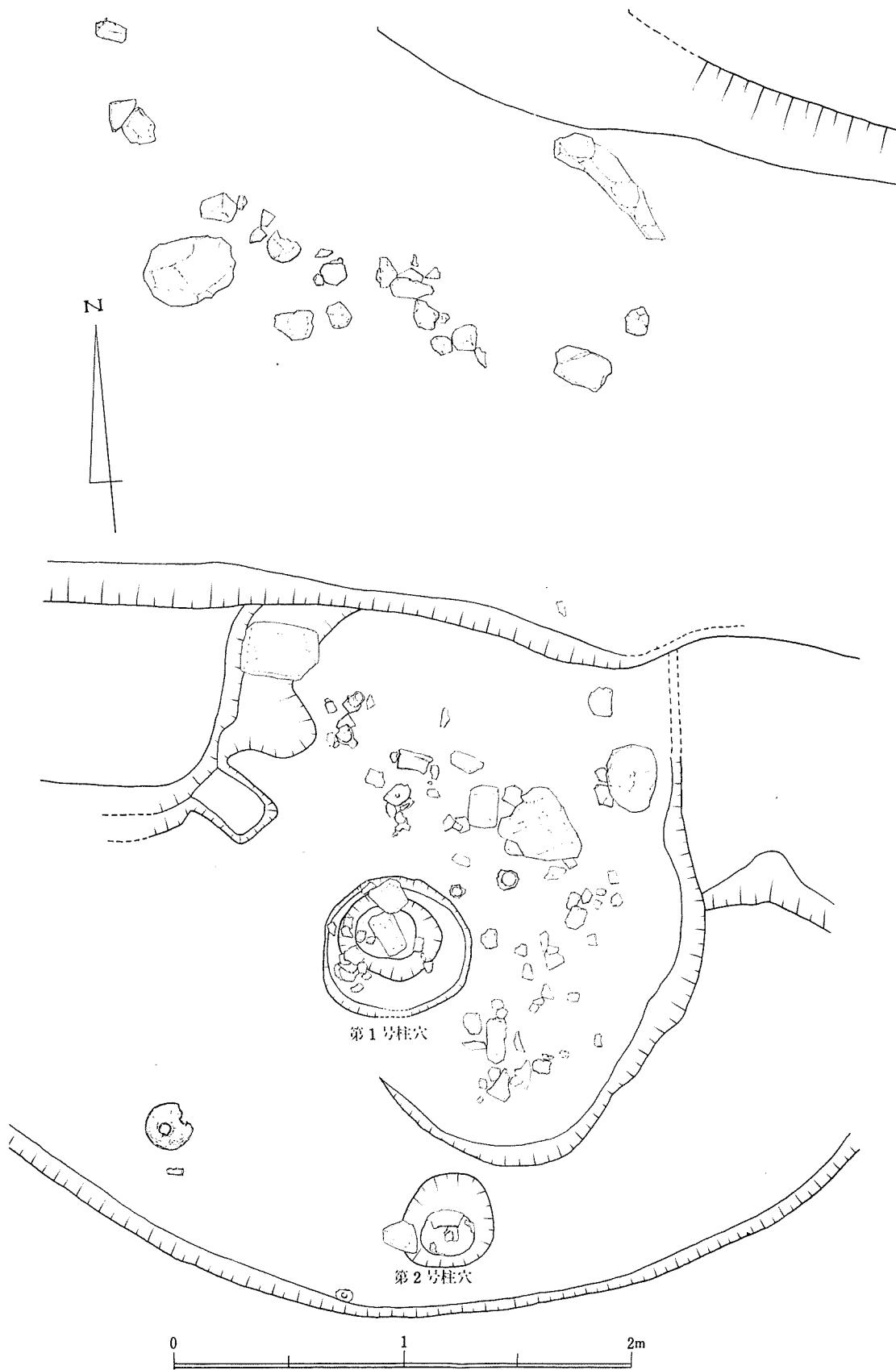


- | | |
|-----------------|------------------|
| 66 山畑古墳群 | 77 高塚古墳 |
| 67 山畑遺跡 (弥生) | 78 二本松古墳 |
| 68 馬ハギ塚古墳 | 80 岩滝山遺跡 |
| 69 成山古墳 | 81 半堂遺跡 (弥生～古墳) |
| 70 瓢箪山古墳 | 82 幸殿遺跡 (弥生～古墳) |
| 72 繩手遺跡 (縄文～古墳) | 88 大賀世古墳 |
| 73 鉢伏古墳 | 89 馬場川遺跡 (縄文～弥生) |
| 74 経塚古墳 | |
| 76 五里山古墳群 | |

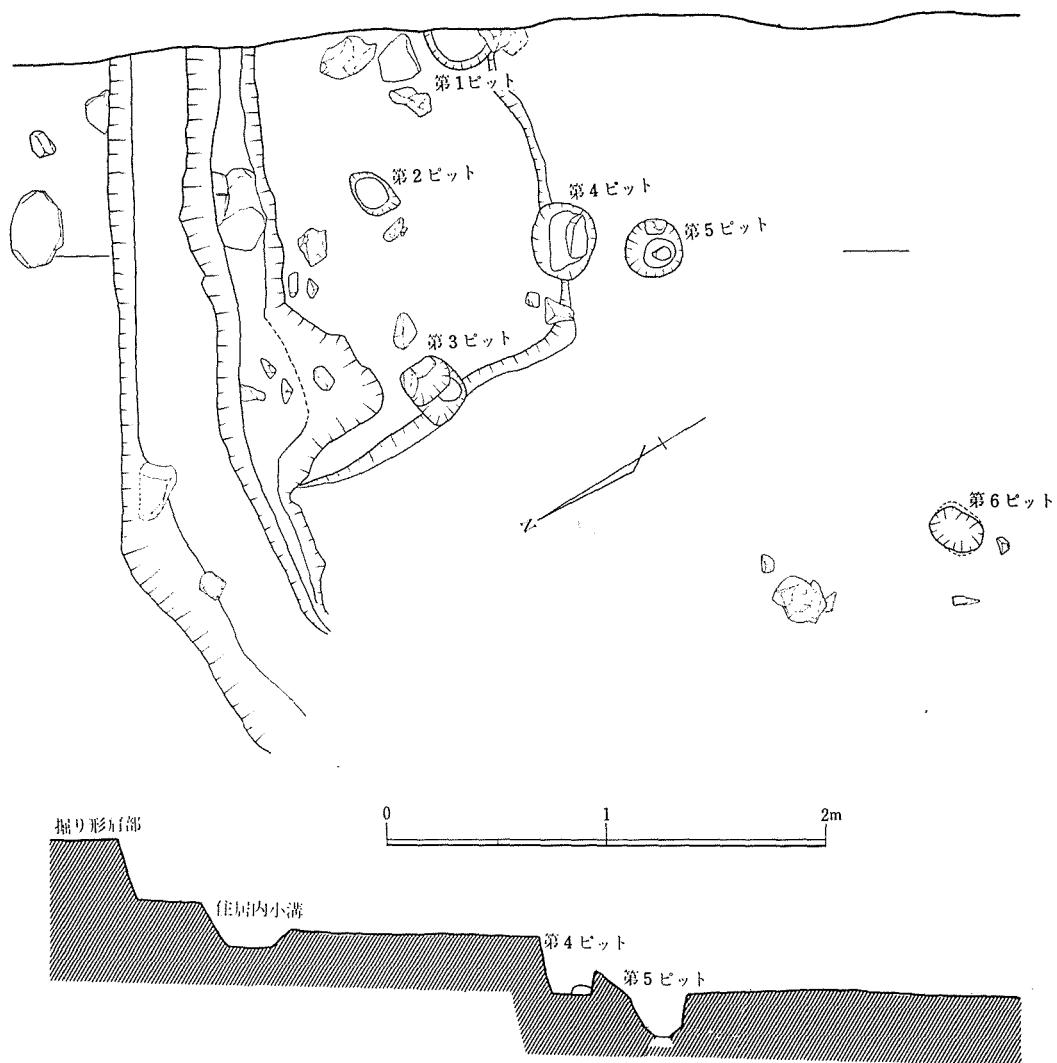
- | | |
|------------------|------------------|
| 77 高塚古墳 | 78 二本松古墳 |
| 78 二本松古墳 | 80 岩滝山遺跡 |
| 80 岩滝山遺跡 | 81 半堂遺跡 (弥生～古墳) |
| 81 半堂遺跡 (弥生～古墳) | 82 幸殿遺跡 (弥生～古墳) |
| 82 幸殿遺跡 (弥生～古墳) | 88 大賀世古墳 |
| 88 大賀世古墳 | 89 馬場川遺跡 (縄文～弥生) |
| 89 馬場川遺跡 (縄文～弥生) | |

<数字は東大阪市遺跡番号を示す。>

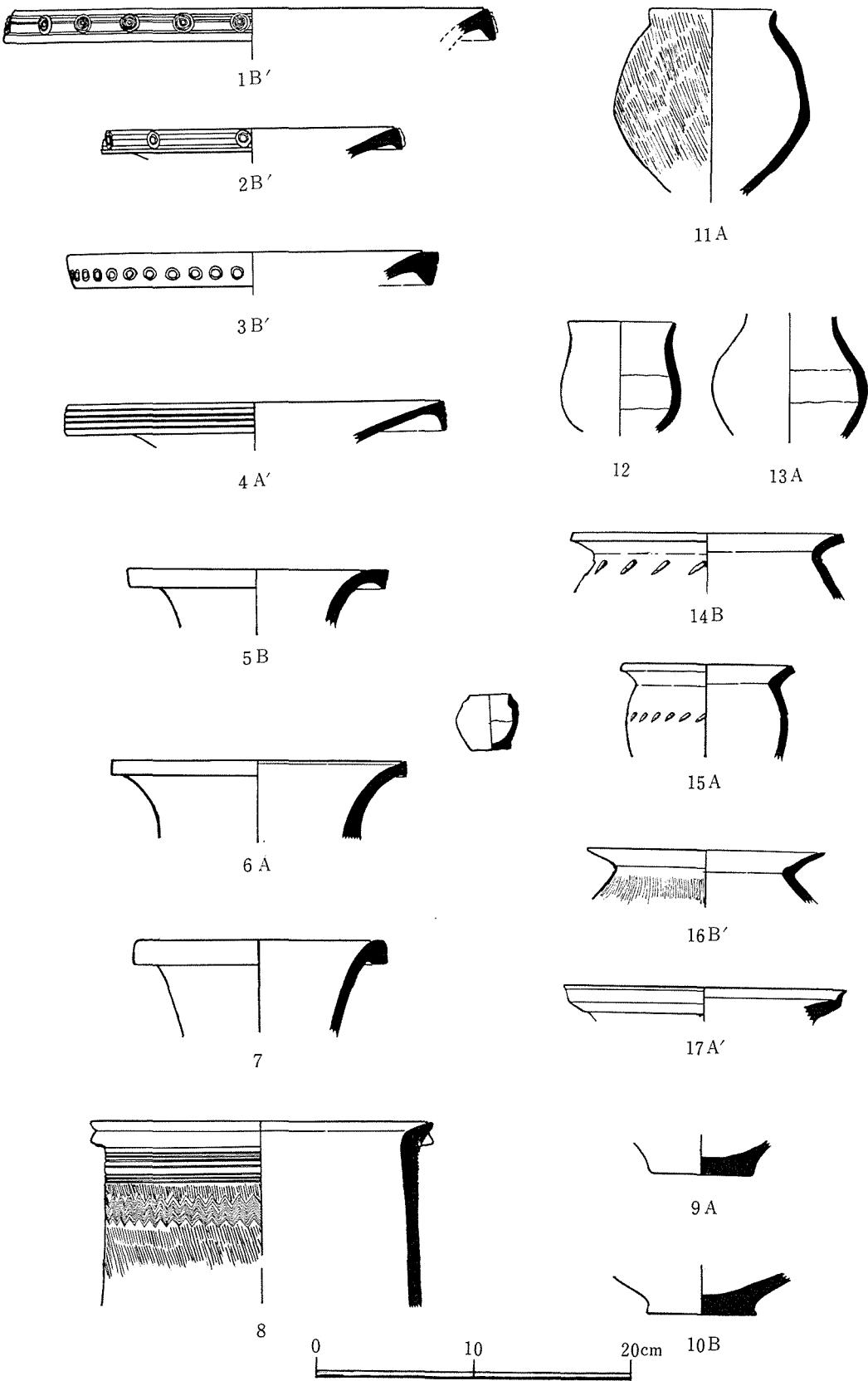
図版二 A地点第一号住居跡実測図



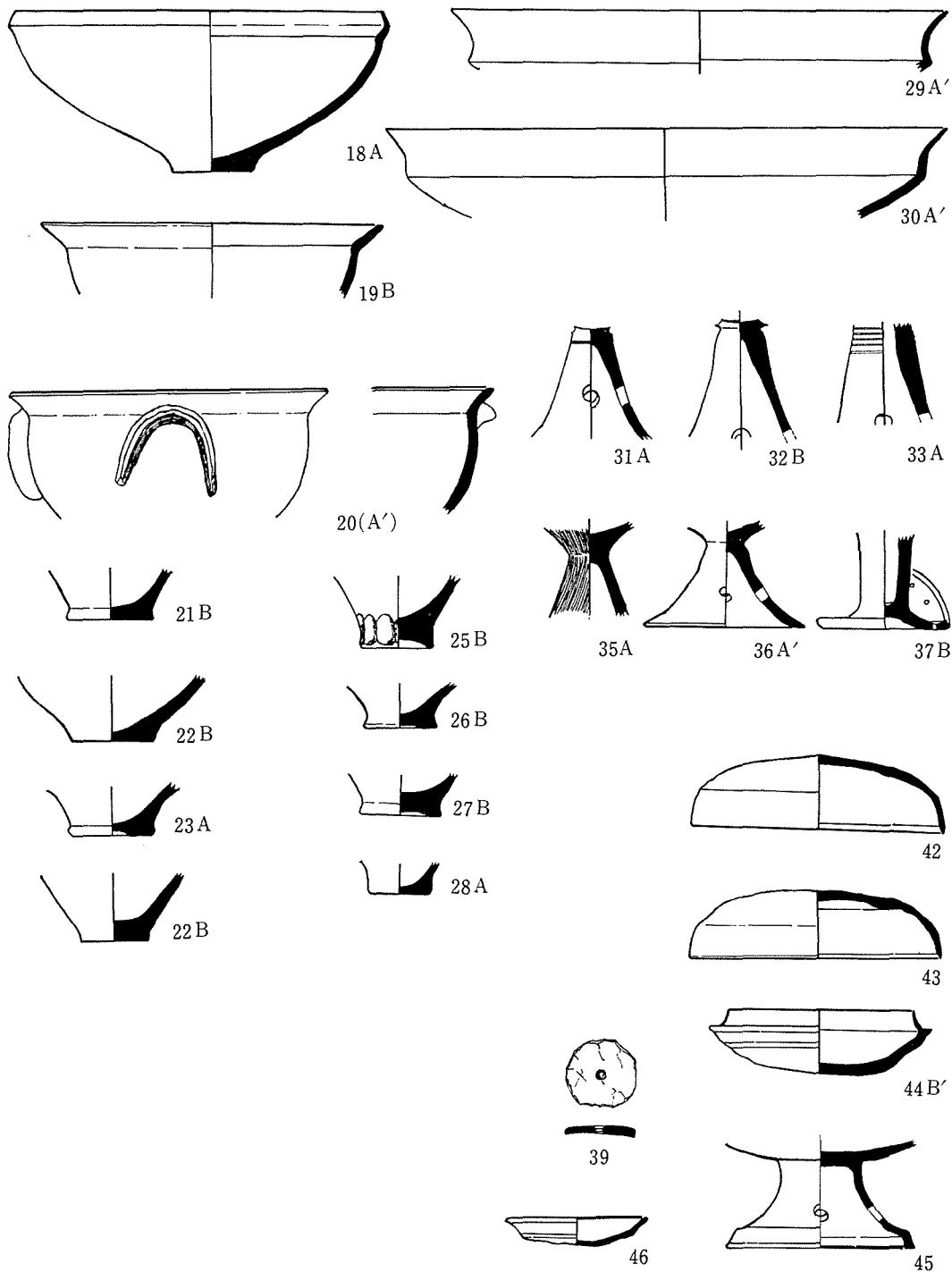
図版 II-B 地点第一号住居跡測量図



図版四 弥生式土器実測図

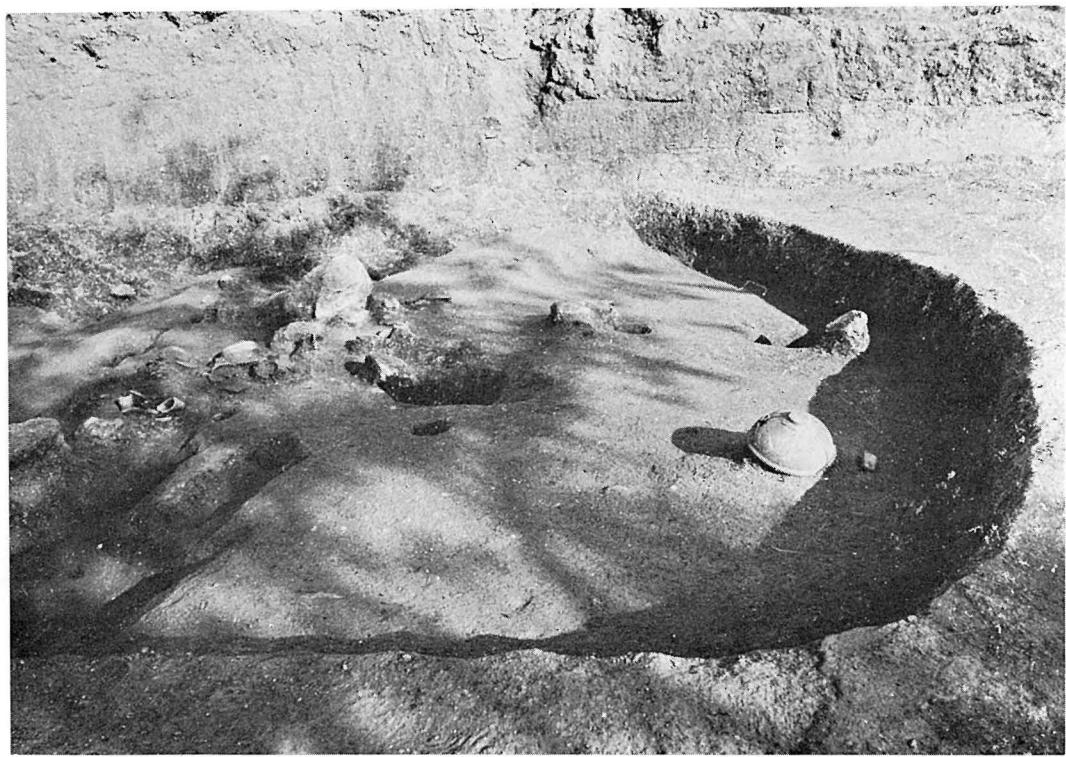


図版五
弥生式土器・須恵器・瓦器実測図



0 10 20m

図版六 A 地点第一号住居跡



図版七 B 地点第一号住居跡

